



ジュニア大使合同同窓会

～ジュニア大使クラブ主催～

社団法人国際フレンドシップ協会 (IFA) では「ジュニア大使友情使節団」の参加者を対象に「ジュニア大使クラブ」(参加任意)を組織し、使節団参加後も継続的な国際交流活動を推奨し、国際交流・協力の提案を受け付け、交流事業の参加を呼び掛けている。去る10月23日には、ジュニア大使クラブ主催の第1回～第27回ジュニア大使合同同窓会が実施された。これまでの参加者3,696名を対象に今春から準備を開始し、参加者からの出欠やメッセージの整理は、参加者からボランティアを募って行った。当時、中学生だった第1回の参加者も40歳となった。

ここに同窓会の概要と参加者からの感想を紹介する。



日時：2011年10月23日(日)
13:30～16:00

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

参加者：引率者12名、

ジュニア大使 140名
次第： (敬称省略)

13:30-13:35 開会

13:40-14:00 創始者横山総三挨拶

14:00-14:20 引率者紹介

会場資料紹介

ボランティア紹介

14:20 乾杯 (第1回アラバマ班)

多胡 有佳子 (高校英語科教諭)

小田切 大輔 (東京都庁)

大谷 宣史 (東京消防庁)

(歓談)

14:45-15:00 参加者近況発表

押切 真千亜 (第4回アラバマ班、
国際協力機構)

岡部 泰子 (第9回オランダ班、
オーストラリア国立大学)

宮本 朋彬 (第19回英国班、
米国カリフォルニア州留学)

15:00-15:20 ウルトラクイズ

各班の訪問先資料より問題

(歓談)

15:45-15:50 IFA からのお願い

16:00 閉会



かねこ りえ 金子 理恵 (旧姓、久保井)

第5回オランダ班参加

先日はジュニア大使同窓会を開いてくださりましてありがとうございます。とても楽しい時間を過ごさせていただき感謝の気持ちで一杯です。

ジュニア大使に参加したのは22年前のことになりますが、当時の様々な記憶がよみがえり、今、忘れか

けている何かを感じながら帰途につきました。



ジュニア大使は私の人生の転換期となり、良い意味で大きな変化をもたらし、私にとっての財産であり宝物です。娘が大きくなりました是非、参加させたいと今からワクワクしております。私自身、自分の子どもをもち初めて皆様の子どもたちに対する想いを理解するに至り感謝の気持ちを伝えられずにはいられなくなり筆をとった次第です。

きたむら めぐみ

北村 恵 第7回アラバマ班参加

先日は大変おつかれさまでした。そしてそのような同窓会を開いてくださり感謝申し上げます。

実はアラバマと一緒にホームステイをしたお姉さんがいらっしゃって昔話に花が咲いてしまいました。最初は同じ年の同じ班ということで喜んでいたのですが、ホストファミリーの話になりお互いが一緒にステイした者同士ということがわかりました。とてもうれしかったです。サプライズってこういうことですね。

世界万華鏡

日本語教育 ながほすみあ 永保澄雄 シリーズ㉓

いつまで食べられるか

国連の推計によると、世界の人口はこの10月31日に70億人を超したそうである。私がまず思ったのは、地球に住んでいる我々がいつまで食べられるかということだった。

1972年の日中国交正常化の少し前、私は二人の仲間と北京にいた。いずれも日本語教師で、中国政府に招かれて来ていたのであるが、この国の大学で日本語を担当するはずの教師たちに、その教授法を教えることになっていた。

それまで中国で一番重視されてきた言葉はロシア語であったが、中ソの関係が悪くなって、それを日本語に切り替えることにしたらしい。つまり、社会主義はそのままにして資本主義国家群に接近を図り、その手始めとして日本に目をつけたものと思われる。

我々の訪中ははじめての資本主義社会からの専門家ということで、その対応は周到であった。費用はすべて中国持ちで、渡航には中国民航のファーストクラスの席が用意された。しかし機体は古く、スチュワーデス(当時の呼び名)の接待も悪かった。コーヒーなどはドンと置いていくだけである。

滞在中の小遣いも支給されたが、月額1万円少しの額なので文字通りの小

遣いだと思っていた。しかし、宿舎のサービスに聞くと、それは熟練工の1ヵ月分の給料に相当すると羨ましがられた。労働を重んずる国であるので、その額は北京大学の教授の月給よりはるかに高いのである。歓迎のパーティーも何度か行われたが、いつもたくさんの方が集まってくれた。そうしたときの警戒は厳しく、関係のない人が近づけないよう守られていた。いや資本主義の害毒を人民に及ぼさないよう守っていたのだろう。待遇は国賓なみだが、扱いはバイ菌扱いだったと思った。

パーティーの席上のことであった。主賓である私たちのテーブルには政府の要人が主人役をつとめ、こまめにおかずなどをとってきてくれた。私はその人と中国語で話した。運が良いと言うか、悪いと言うか、私は学生時代、中国語を勉強したことがあったのである。日本で習った中国語が話してそう通じるはずはないのであるが、その要人は私の面子を立ててくれて、ともかく中国語で応じてくれた。たまたま話が食糧の自給のことになった。すると、にわかになら声落とし、私の耳にささくようにこう言ったのである。

「実はそのことを考えると頭が真っ

白になって、眠れないことがあります。どうしてこれだけの我が人民を食べさせていけるか」。当時、中国の人口は4億だったと思うが、私には天文学的数字に思えた。それだけの人数の人が食べるというものは、皆目見当がつかなかったが、ただ戦中戦後、私も飢えていた時代があったので、その心配は実感としてよく分かった。

中国はその後、一人っ子政策をとり、しかもその人口は9億に達している。どうしてこの人たちは食べていくのだろうか。いやこれは他人ごとではない。日本の食糧自給率も既に40%を割っている。これからはお金があっても食料を買えない時代が必ずくるに違いない。そのとき、私たちはどうしたら良いのだろうか。差し当たり、自給率だけでも伸ばす努力をしなければならない。私たちも寝てはいられないのである。

平成23年11月17日発行
社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ502
発行責任者：及川 伊佐子
編集：事業部 03(3582)3021
印刷：音和堂印刷